

禅宗寺院と室町幕府

〔鹿児島県内の十刹・諸山〕

山家 浩樹

只今、御紹介に預かりました山家と申します。本日はよろしくお願ひします。

今日は、「禅宗寺院と室町幕府」という題でお話することに致しました。前半はおもに五山の話、京都や鎌倉の話が中心になります。後半は、今館長にも御紹介いただきましたように鹿児島県内の十刹・諸山に認定された禅宗寺院の話をしてみたいと思います。私は、普段鹿児島県のことをそれほど詳しく勉強しておりませんので、後半は特に理解不十分な状態でお話することもありますが、あらかじめお許しいただければと思います。

まず導入として、禅僧のイメージからお話しようと思います。禅僧というと、たとえば永平寺さんなどのように、修行の場面、深遠な場所座禅に集中しているというイメージが強いと思いますが、実際は必ずしもそれだけではありません。もともと禅というものは仏教を構成する要素の一つで、そこを特化した形で禅宗というのが成立して参りますので、初期の段階では、他の宗派の素養も身に付けるのが当然のことでした。この状態の禅宗のことを少し前までは、兼修禅という言い方をして、それに対して座禅に打ち込む、只管打坐といわれるような禅宗を純粹禅という言い方をしたこともありましたが、この表現の仕方に従えば、兼修禅も多分に存在していたということになります。具体的には、密教である、

真言宗や天台宗の伝授を受ける禅僧も少なからずおります。浄土宗に強い興味を持ち、念仏とはどういうものかを懸命に調べようとする禅僧もいらつしゃいました。念仏も禅と同じように本来は仏教の在り方の一つですので、禅を主に行っている禅僧でも念仏を行うことは不思議ではありません。また、禅僧は学問を行いますので、南都六宗と言われる、たとえば東大寺は宗派で言うところと華嚴宗、興福寺は法相宗になりますが、これら天台宗・真言宗が入る以前の時代の宗派を勉強する禅僧もいました。もう一つは、座禅に打ち込むというイメージからすると政治とは縁遠いというイメージもあると思いますが、必ずしもそうではありません。禅僧の場合は、中国の古典や詩も勉強しますので、知識人としての位置づけられていました。その知識の上に、政治の顧問であつたり、あるいは中国語がある程度出来しますので、中国あるいは朝鮮半島その他の外交の担い手として活躍したり、さまざまな場で政治の中心に関わっていく禅僧も少なくありません。幅広く勉強し、政治の中でも活躍していくというのが中世、そして江戸時代を通じた禅僧の在り方です。そのように政権に近づいていきますと、反面、政権の方から統制されるという仕組みが出来上がってきます。

以下、五山以下の話をするにあたって、対象となるのは、禅僧全体ということではありません。中世では、夢窓疎石という禅僧の教えを受けた人達、それを受け継ぐ禅僧たちは、室町幕府との関係を強くしてい

ますので、室町幕府による、五山・十刹・諸山という禅寺の制度の中に取り込まれていきます。禅宗は曹洞宗と臨済宗にわかれますが、そのうち臨済宗の禅僧たち、その中でも、室町幕府では主流派となる夢窓疎石の法を継ぐ人たちが中心になります。

それ以外の禅僧たちとは、たとえば臨済宗であれば、夢窓一派とは距離をおいている、お寺で言えば、京都に大徳寺とか妙心寺とかありますけれども、それらを根拠にしている禅僧、あるいは曹洞宗の禅僧になります。これらの禅僧もさきに挙げた二つの特徴を持ってないということではありません。大徳寺や妙心寺を拠点にしている禅僧達というのは、室町幕府の下では、五山・十刹・諸山という仕組みの外にでてしましますが、室町幕府が徐々に弱くなっていきますと、逆に妙心寺等の禅僧達が勢力を強めていって、地方の戦国大名に影響力を強めていきます。東国というと武田氏や今川氏の政治顧問になっているのはほぼ妙心寺派の禅僧ですし、中には曹洞宗のお坊さんがそういう位置を占めることもあります。ただ、今日は、室町幕府による統制である、五山以下の話だけにさせていただきます。

では、五山とは何かということになります。もともとは、中国の南宋十三世紀初頭、日本でいうと鎌倉時代の初めの頃、中国で、五山・十刹・甲利という言い方の三段階で禅宗系の寺院を管理する制度が確立しました。このころ日本には中国から盛んに情報が入ってきますので、鎌倉幕府、北条氏の政権が導入していき、鎌倉時代後期に五山・十刹・諸山という形で禅宗寺院が体系化されていきます。

どのお寺を五山とするか、どのお寺を十刹とするかというのは、政権

である幕府が決める、より端的に言えば将軍が認定するという形になっています。また、この五山・十刹以下に認定されたお寺では、そのお寺のトップである住持は、推薦を受けたうえでではありませんが、将軍が決定し任命します。この将軍による住持任命は、五山・十刹・諸山と言われる禅寺の大きな特徴になってきます。

通常どの位の任期になるかというと、三年二夏といいますが、大体夏を二つ過ぎす期間となります。夏の修行期間を夏安居（げあんご）と言いつつ、この期間が修行に大きな意味を持ちますので、修行期間を二回経験して、足掛け三年くらいが大体一つの任期になります。任期を終えるとまた次の階梯に登って次の禅寺の住持となっていくきます。なかには、任命はされたけれども実際にはそのお寺に赴かないこともしばしば起こりますが、本来の形ではありません。

将軍が住持を任命し、必ずしも推薦どおりとなりませんので、住持のお弟子さんが次の住持になるとは限りません。禅僧の場合、住持になった際に、自分の師匠が誰であるか言明する機会がありますので、誰の弟子が誰であるというのが明確になります。その結果、法の相承関係で、血縁を示す系図と同様の法系図が出来ます。そのため宗派が明確で、何々派という言い方ができます。天台宗、真言宗の場合には、色々な法流があつて、ひとりの僧侶は、法流を色々なお師匠さんから学びますので、師匠が複数いることが多くなると異なります。そこで、禅宗の場合、放つて置けば一つのお寺の住持は弟子たちはずっと相承されていくことになりがちです。ところが、諸山以上に認定されると、その現象は、原則としては起きなくなります。これを、十方住持といいます。十方、つまり色々な方面から住持を任命するという十方住持が諸山以上の住持

の原則になっています。しかし、なかには、必ずしもうまくはいかないので、特定の宗派からしか住持にならないお寺も五山の中にはあります。特定の宗派からしか住持にならない、特定の禅僧の弟子に相承されていく禅寺を徒弟院（つちえん）と呼んでいます。

禅宗の場合は、このような耳慣れない読み方をする用語がとても多いです。これもなじみにくい一因です。今でも、同じ言葉でも臨済宗と曹洞宗で読み方が違ったりしますので、我々も困ることがあります。今お話ししているなかでも、「十刹」は「じゅっさつ」と言っているのですが、辞書を引いていただければわかる通り、振り仮名で多いのは「じっせつ」という読み方です。今日は「じゅっさつ」と言わせていただくことにします。そのような様子で読みはだいぶ面倒です。

次に、五山・十刹・諸山それぞれの話に移ります。五山はおおよそ五つの禅院からなります。一位から五位までの順位があります。十刹はその下にあつて、十の禅院からなり、一位から十位まであるのが本来の形です。それに対して諸山は順位もありませんし、もともと数も決められていません。これは日本全国に広く存在しています。

最初に五山です。どのようなお寺が五山になったかを最初にご紹介しておきたいと思います。五山の場合には鎌倉と京都の地域にしか認定されていません。表1をご覧ください。まず鎌倉です。五山となったのは、表に挙げた五つの寺院だけです。成立年代順に掲げてあります。

最初に挙げた浄妙寺というのは、成立は文治四（一一八八）年とかなり古いですが、実際に禅宗寺院として意味を持つのは鎌倉の末の頃です。再興は足利貞氏となっています。貞氏は、足利尊氏の御父様で

表1 五山の寺院

寺名	開創		開山	開基
【鎌倉】				
浄妙寺	文治4	1188	退耕行勇	足利義兼 再興足利貞氏
寿福寺	正治2	1200	栄西	北条政子
建長寺	建長5	1253	蘭溪道隆	北条時頼
円覚寺	弘安5	1282	無学祖元	北条時宗
浄智寺	弘安4以降	1281	大休正念 (兀庵普寧・南洲宏海)	北条師時
【京都】				
建仁寺	建仁2	1202	栄西	源頼家
東福寺	寛元元	1243	円爾	九条道家
万寿寺	正嘉年中に禅寺に	1257-59	十地上人覚空 (東山湛照)	(郁芳門院)
南禅寺	元応4	1291	無関玄悟	亀山天皇
大徳寺	嘉暦元	1326	宗峰妙超	花園天皇
天龍寺	暦応2	1339	夢窓疎石	足利尊氏
相国寺	永徳2	1382	夢窓疎石 (春屋妙葩)	足利義満

す。実際は尊氏の時代になってから機能したようなものなので場合によつては鎌倉の最後に回していただいてもよいです。そこで、二番目の寿福寺が大事になってきます。寿福寺は北条政子が開基となっています。頼朝・政子時代に栄西を招じて開創しましたので、鎌倉の禅宗の寺としては一番古い由緒を持ちます。ただし、栄西自体も含めて、禅という要素に特化した禅宗ではありません。

それに対して、それ以下の建長寺、円覚寺、浄智寺は、渡来僧、中国で修行された中国人で、日本にきた禅僧に対し、北条氏が禅寺を用意して、開山に招いたというものですので、より禅の要素が強い禅宗になります。建長寺、円覚寺はよくご存知だと思います。

建長寺の開山は蘭溪道隆です。蘭溪道隆という方は、日本から招いたのではなくて、色々な事情があり、日本から行っていたお坊さんと一緒に日本に渡ってきたという経緯がある高僧です。少し話はずれませんが、蘭溪道隆は鹿児島とも非常に深い関わりがある方でございます。肝付町に道隆寺という、まさに道隆という名前をつけたお寺があります。今は跡になってしまっており、肝付氏関係の石塔がたくさんあって壮観です。蘭溪道隆が日本にきて最初に開いたお寺であるということで道隆寺という名前を付けているという伝承を持っています。肝付氏の居城である高山城のすぐ側にあり、一定の由緒のある寺院だと推定されますので、道隆との関係はしっかりと考えていかなければならないと思います。蘭溪道隆は鹿児島県に由緒のある方であるということを紹介させていたいただきました。

鎌倉という都市は、古い時代の中心軸は東西方向にあったといわれます。浄妙寺は東の金沢へ行く道沿い、東西軸に位置し、古い成立を窺わ

せます。この道を西に行くと、山を越える前に寿福寺がありますので、やはり古い立地だということがわかります。一方、建長寺・円覚寺・浄智寺は、鎌倉中心部からは、巨袋坂や亀ヶ谷坂を超えた先にあり、鎌倉の周縁部に立地しています。

今度は京都の話です。京都は五つ以上あり、表1に従って順に説明します。一番古いのは建仁寺です。源頼家、すなわち頼朝の次の将軍が栄西を招じて開山したというお寺です。鎌倉で言えば寿福寺と同じ位置づけのお寺になります。武家にとっての禅宗寺院といえばまず建仁寺になります。建仁寺の場所は、鎌倉幕府が六波羅探題を置いた場所になります。もともと平家が京都で根拠地にしていた場所で、その後鎌倉幕府になっても根拠地にしましたので、ここに幕府と関係が深い建仁寺が造られたわけです。

それから、東福寺が次に成立します。摂政・関白に任ぜられる、藤原道長の流れを汲む家の一つである九条家を中心となって、他の摂関家も協力して建てた禅寺です。万寿寺も東福寺と性格の類似した禅寺です。

京都の禅寺で一番重要なのは、龜山上皇が造った南禅寺です。天皇家の創建した禅寺としては初めてのものです、高い寺格を誇ります。同様に天皇家と関わるのは大徳寺ですが、あとでお話するように、大徳寺は後に五山の枠から離れていってしまいます。

ここまでが鎌倉時代の成立で、ここから室町幕府の時代になると、天龍寺と相国寺という禅寺が造られます。嵯峨にある天龍寺は、もとは龜山殿という天皇の離宮であった場所で、後醍醐天皇が亡くなった後、後醍醐天皇以下の戦没者を弔う施設として足利尊氏らが造立した禅院です。相国寺は三代将軍である足利義満の時に造立した禅寺です。足利將軍家

の氏寺のような位置づけになります。尊氏の時代には、幕府の中心が置かれていた足利直義の邸宅に隣接して、等持寺という氏寺がありました。義満は花の御所、室町殿を新たに造った時に、その傍らに氏寺も新設して、相国寺を造ったこととなります。

次に順位です。表2をご覧ください。上と下は、同じ内容ですが並べる順番を変えてあります。上は京都と鎌倉を分けて順に並べ、下は京都・鎌倉一緒にして順位に従って並べました。

鎌倉幕府の時にどうだったかは、はっきりわかりません。鎌倉幕府のもと五山というものがあつたことは間違いないのですが、そもそも五つの寺院が何だったかということも明確ではありません。建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺は間違いなく、もう一つは、どうも京都の建仁寺が入っていたと考えるのが有力かと思えます。南禅寺は、天皇が造られたので、別格で准五山になっています。

後醍醐天皇の時期になると鎌倉の要素が少し減っていきます。建長寺、円覚寺は寺格が高いので残りますが、京都にある建仁寺に加えて、東福寺、万寿寺が入ってくる。さらに、大徳寺が天皇家の關係の禅寺ということ、南禅寺とともに五山の中に入ってきます。建武政権でも順位はわかりません。南禅寺と大徳寺が天皇家のお寺ということ、寺格が高かったのはわかりますが、どちらが一位でどちらが二位であったかはわからないのです。

室町幕府になり、天龍寺が創建された後になってようやく順番がはっきりします。建武政権時にも五を超えていたのに、天龍寺が新しく一つ増えますので、一位と二位については、京都と鎌倉の両方で設けること

表2 五山 位次の変遷 上表は京都・鎌倉別 下表は位次別

	南禅	天龍	相国	建仁	東福	万寿	大徳	臨川	建長	円覚	寿福	浄智	浄妙
鎌倉幕府	准			○?					○	○	○	○	
建武政権	◎			○	○	○	◎		○	○			十利
暦応5頃 1342	1	2		4	5				1	2	3	准	
延文3頃 1358	1	2		4	5	5*		十利	1	2	3	5*	5*
永和3 1377	1	2		4	5			5東福下	1	2	3	5*	5*
康暦2 1380	1	2		4	5	5*		准十利	1	2	3	5*	5*
至徳3頃 1386	上	1	2	3	4	5	十利	十利	1	2	3	4	5
応永8 1401	上	2	1	3	4	5	十利	十利	1	2	3	4	5
応永17 1410	上	1	2	3	4	5	十利	十利	1	2	3	4	5

◎は別格
*1 延文元に仏心寺が准になっている
*はやや下

	南禅	天龍	建長	相国	円覚	建仁	寿福	東福	浄智	万寿	浄妙	大徳	臨川
鎌倉幕府	准		○		○	○?	○		○				
建武政権	◎		○		○	○		○		○	十利	◎	
暦応5頃	1	2	1		2	4	3	5	准				
延文3頃	1	2	1		2	4	3	5	5*	5*	5*		十利
永和3	1	2	1		2	4	3	5	5*		5*		5東福下
康暦2	1	2	1		2	4	3	5	5*	5*	5*		准十利
至徳3頃	上	1	1	2	2	3	3	4	4	5	5	十利	十利
応永3	上	2	1	1	2	3	3	4	4	5	5	十利	十利
応永17	上	1	1	2	2	3	3	4	4	5	5	十利	十利

になります。京都一位として南禅寺、二位として新しくできた天龍寺、鎌倉の一位として建長寺、二位として円覚寺。そして三、四、五位は京都と鎌倉一緒にしています。初代將軍の足利尊氏が亡くなった少し後くらいになると、五山の五番目ではあるけれども少し低い寺格を設定して、五の位を少し増やします。*印をつけたところです。鎌倉で二つ、京都で一つ、増やしています。そののち臨川寺というお寺を五山の中に入れた時期がありますので、表は分けてあります。臨川寺については後で説明します。

次に五山が大きく変わるののは、相国寺が創建された時です。足利義満の時代になり、自ら造った相国寺を五山の中に入れたいとなりましたので、五という数はさらに足らなくなり、大幅な改編をします。まずは圧倒的に寺格が高い南禅寺を一位より上、五山より上にしてしまいます。そして、天龍寺を一位、相国寺を二位にして京都だけでも五つ決めてしまいます。一方鎌倉は独自に五つ決め、建長寺・円覚寺の一、二位は残した上で、三、四、五位を決めてしまいます。つまり五山と言いながらも十一の禅寺が認定されることになりました。これが安定して、室町幕府が存続したうちは機能し、ある意味では現在まで、もちろん現在は意味はありませんが、寺格として維持されることになりました。

ここで少しまとめをおきます。まず、五山は、鎌倉幕府の時は鎌倉中心であり、建武政権の時には追加があつて京都中心でした。天龍寺開創に伴って一、二位が京都・鎌倉並立になり、尊氏が亡くなった後に准五位が設けられます。この頃までは鎌倉中心というイメージが強いですが、相国寺開創に伴って南禅寺を上にする事によって全部で十一

になります。寺院ごとにみると、鎌倉では建長寺、円覚寺の寺格が高く、建武政権では大徳寺、南禅寺、室町幕府では將軍家と関わりの深い天龍寺、相国寺を重視しています。五山の十刹以下とは異なる特徴として、鎌倉と京都からしか選ばれないことが挙げられます。京都・鎌倉で一位、二位を分ける、あるいは双方で一位から五位を設ける場合、同じ位の関係には、かなり気を遣ったようです。あくまで同格であるということ厳密に規定しています。たとえば、五山の一位と五山の二位だったら、五山の二位の住持は五山の一位の住持に、下の者として礼をしなければいけません。京都と鎌倉の同じ一位同士であれば、同じ格として礼を取ることを決めています。

次に、これまで省略していたところをご説明したいと思います。まず、五山の中に最終的に組み込まれない禅寺についてです。まずは、建武政権の時に重要視された大徳寺です。至徳三（一三八六）年に十刹九位に確認されますが、永享三（一四三一）年には願いにより十刹からも外れています。天皇家由来のお寺なので、本来は手厚い保護を受けるべきお寺なのですけれども、大徳寺は大応派の徒弟院であることを守ります。禅宗では師匠関係がはっきりしますので、師匠の名をとって何々派という言い方をしますが、大徳寺開山は大応国師南浦紹明の弟子宗峰妙超で、大徳寺はその門弟で住持を継承することを選びます。十方住持の精神に反するので次第に五山から離れ、最後は十刹からも離れて独自路線を進みます。独自路線に行く大徳寺とその流れを汲む妙心寺の門派は、さきほど申しましたように、地方に展開していき、戦国時代にはとても力を持つようになります。

次に、東福寺および万寿寺、これらも聖一派の徒弟院です。聖一国師

円爾を祖とする門派で継承されます。しかし、大徳寺とは異なり、東福寺と万寿寺は、五山の地位を維持します。五山でありながら徒弟院であり続けることが可能だった一因として、五山の中心をなす夢窓疎石の派と関係が近かったことが挙げられます。しかし、異例であることは確かです。五山の中では特殊な扱いを受けました。たとえば、足利義満幼少期に政権を担った細川頼之は、東福寺に様々な統制を加えようとはしません。万寿寺住持は、先ほど述べた儀礼的な部分で、他の五山寺院の住持から差別的な扱いを受けることもありましたが。

あとは、臨川寺と相国寺です。表2をご覧いただくと、ごく短期間、臨川寺は、五山の中に入ってきました。永和に入ってから、康暦に外れる、これは一三七九年の康暦の政変という事件と関係します。足利義満は、お父さんの義詮が亡くなって幼いうちに將軍になりますので、幼少期十数年は、管領であった細川頼之が支えます。その細川頼之が失脚する事件が康暦の政変です。夢窓疎石の後継者となった春屋妙葩は、もともと頼之と関係が深かったのですが、頼之が政治を担っているうち、頼之と対立し、春屋妙葩は京都を離れて隠遁してしまいます。京都では春屋妙葩とは別の夢窓疎石の弟子たちが活躍します。康暦の政変で頼之が失脚すると、春屋妙葩は復活します。この状況の変化から考えると、臨川寺を五山に入れたのは細川頼之たちの意向で、そこから外してもとに戻したのは、復活してきた春屋妙葩らの考え方であったとわかります。春屋妙葩らはあくまで臨川寺は十利と思っていたのが、それに反する考え方を持っていた細川頼之たちは五山の中に入れてしまおうとしたわけです。これは先ほどからお話している徒弟院とか十方住持ということと関係します。臨川寺は、もとは後醍醐天皇皇子が建てた寺で、夢窓の管轄下に

入り、夢窓派の拠点となっていた禅寺、夢窓派の徒弟院でした。細川頼之は、臨川寺を五山とすることで十方住持とし、春屋妙葩に代表される夢窓派の勢力を弱めようとした。それに対して春屋妙葩らは反対し、復活後に五山から外し、徒弟院に戻しました。

もう一つは相国寺です。これも同様に夢窓派の動向と関係します。相国寺は基本的に十方住持制をとりませんが、天龍寺と同じく夢窓派の影響が強い禅寺です。夢窓派の中では、天龍寺よりも上であるという意識が強いようです。そこで、夢窓派の中で、天龍寺ではなく相国寺を一位にしてしまおうと考えた禅僧たちがおり、表2にみえるように、義満の政権期に、相国寺を一位に変えてしまいます。將軍が義持に変わったあと、元に戻っています。

次に十利の話を少しだけいたします。建武政権期にどの禅寺が十利であったかははっきりわかりませんが、鎌倉浄妙寺、豊後万寿寺などが確認され、五山になる前の南禅寺も入っています。室町幕府になってからの十利のリストは五山で確認できると同じ時期の四種類ほど確認されます。暦応五（一三四二）年、延文三（一三五八）年ではいずれも十箇寺、康暦二（一三八〇）年では十箇寺に収まらなくなり、准十利六箇寺を設けて、十一位から十六位としています。至徳二（一三八六）年のリストは、やや信頼度が落ちますが、五山が京都と関東に分かれたように、関東十利が設けられたようです。その後、十利の数は増えていったと思われれます。十利は京都・鎌倉に限りません。康暦二年までに、京都・鎌倉ではない寺院で十利になっているのは、筑前聖福寺、豊後万寿寺、上野長楽寺、駿河清見寺などです。

表3に、主要な十刹寺院とその順位の変遷をまとめました。鎌倉と京都に分けていますが、表中の順位は共通の順位になります。順位はおおよそ固定していると思います。一番上にある鎌倉の禅興寺は、いま残っていませんが、塔頭であった明月院は現存し、紫陽花で有名になったお寺です。禅興寺は蘭溪道隆を招じた、由緒あるお寺です。二番目の東勝寺もいまはありません。若宮大路の東の筋をすこし東に入ると、滑川をわたるところに東勝寺橋がかかっています。最後の執権北条高時の腹切やぐらがその先にあり、その手前が東勝寺跡です。つまり東勝寺というのは北条氏滅亡の場所になります。もう一つの万寿寺も今はないお寺です。京都では、真如寺は嵯峨にあり、江戸初期に復興されています。安国寺は今はありません。臨川寺は先ほどお話ししました。等持寺もさきほどお話ししたように、足利直義邸の隣にあった、京都での最初の足利氏の氏寺です。氏寺のため、最初は十刹には入りませんでした。康暦には十刹の中でも非常に格の高い寺として位置づけられています。相国寺が五山になる前提になっているともいえ、五山・十刹の性格の変化を考えるうえでは興味深い事例です。

前半の最後に、諸山も含めた話にすこしだけ触れます。五山・十刹・諸山の制度の大きな特徴として、住持の格が、諸山、十刹、五山と上がっていくことが挙げられます。諸山を経ないと十刹住持になれず、十刹を経ないと五山の住持にはなれません。諸山住持になった時に、公的な禅寺の住持として認められることとなります。その入寺の際には、私は誰某の法を継ぎますと明確に宣言することも求められます。また、呼ばれ方など、外的な区分も明確にあります。諸山住持は西堂と呼ばれますが、諱、下の名で呼ばれます。夢窓疎石を例にとると、諸山住持は疎石西堂

表 3

鎌倉の十刹寺院 暦応5→延文3→康暦2 の位次

禅興寺	文永5・6	1268・69	蘭溪道隆	北条時宗	2→1→2
東勝寺	安貞元以前	1227	退耕行勇	北条泰時	5→3?→4
万寿寺			無学祖元 (高峰顕日)	北条貞時	6→4?→5

至徳3の配列順では、瑞泉寺1、上記3寺は順に2～4番目

京都の十刹寺院 暦応5→延文3→康暦2 の位次

真如寺	康永元	1342	無学祖元 (夢窓疎石)	高師直	8→6→7
安国寺			大同妙喆 中興無徳至孝	中興細川顕氏	9→7→8
臨川寺	建武2	1335	元翁本元・夢窓疎石	後醍醐天皇	無→10→11
等持寺	暦応元頃	1338	古先印元・夢窓疎石	足利直義・尊氏	無→無→1

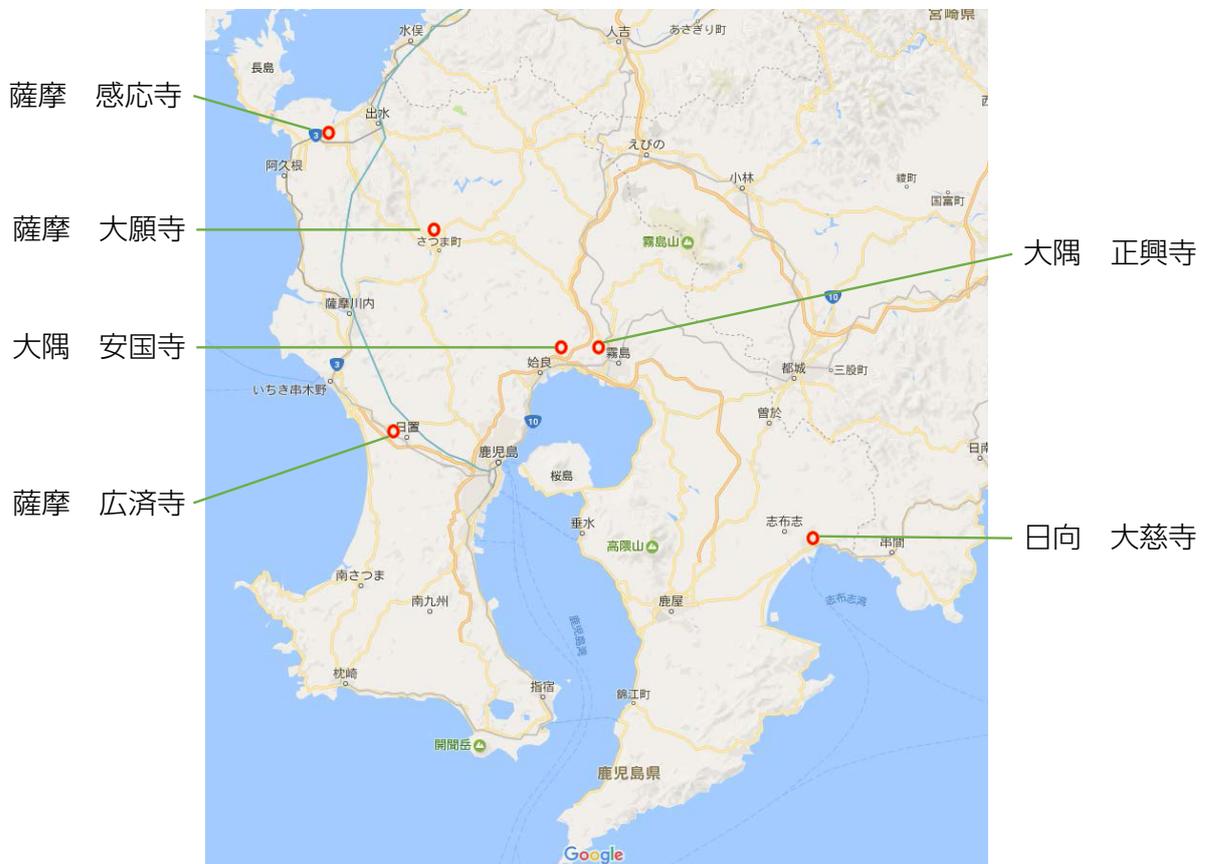
至徳3の配列順では、等持寺1 臨川寺2 真如寺4 安国寺5 大徳寺9

となります。十刹住持に格が上がると、道号、上の名で呼ばれ、今度は夢窓西堂となります。さらに五山住持になると東堂という呼び方にも変わります。それから、正式に和尚と呼べるのは五山住持だけになります。

○

さて、話しを後半にうつし、鹿児島県の十刹・諸山についてお話しします。鹿児島県の十刹・諸山がどういってお寺かは、まず『扶桑五山記』などに残されたリストからわかります。いつの時代のリストかは、はっきりわかりませんが、大体江戸時代初頭か中世末だろうといわれています。『扶桑五山記』は、中国と日本の五山・十刹・諸山及び五山の住持のことを書いた本で、似たような史料は『支桑禅刹』などいくつかあります。扶桑は日本を指し、支桑は中国と日本を意味します。そのリストによると、今の鹿児島県の十刹は日向の大慈寺です。大隅の正興寺はそのリストでは諸山として見えますが、他の信頼すべき史料、『鹿苑院公文帳』に、天文十六（一五四七）年に十刹になったとはっきり書いてあります。諸山となっている禅寺としては、大隅安国寺、薩摩広済寺、薩摩大願寺、薩摩感応寺が見えます。図に場所を示しておきました。いまでも道路が集まるような交通の要衝や海上交通での重要地点、つまり今でも中心となるような場所に立地しているのがわかります。

まず、十刹の大慈寺と諸山の大願寺についてお話をします。大慈寺は、今も志布志市志布志町志布志に存在します。開山は玉山玄提、二代は剛中玄柔という有名な方で、東福寺と同じ聖一派のお寺です。写しが多いものの文書がたくさん残されていて、歴史がわかります。寺の後ろ盾となる人を檀那と呼ぶとすると、南北朝時代、大慈寺の檀那は、複雑



な政治情勢の中で、楡井氏から畠山直顕に代わっていきます。畠山直顕は、幕府の中心人物ですが、足利尊氏の弟の直義に味方しました。そこで、尊氏と直義が対立する観応の擾乱の時には、反幕府方になります。ふたたび尊氏方、幕府方に戻るといふ複雑な動きをしており、その後、段々と勢力を失っていきます。すると、大隅から日向の方に勢力を伸ばしていった島津氏久が檀那となります。諸山になった時期は、大慈寺文書の中に、延文四（一三五九）年十二月十五日の幕府の認定書がありますので、この時で間違いありません。同様に、十利になったのも、文安元（一四四四）年八月六日で間違いのないと思われれます。

一方大願寺は、黄龍派の寺院で、檀那は祁答院渋谷氏という渋谷氏一派です。諸山になった時期は、南北朝期ですが確定はできていません。『祁答院旧記』という、すこし後に成立した書には、貞治五（一三六六）年八月二十七日と書かれています。一方、大願寺住持となった天祥一麟という方の行状には、永和三（一三七七）年十二月に天祥一麟が大願寺の住持になる際、大願寺が諸山になって初めての住持であると読めるような文章が書かれています。禅僧が亡くなった後に、お弟子さんたちは師匠が何をしたかを簡単にまとめる習慣があり、それを行状と呼びます。ただ、天祥一麟には、大願寺に住持した時の法語なども残っていて、永和四年十一月に任命され、翌年二月に実際に住持したとわかります。諸山になったのは、天祥が入寺する直前とすると、天祥の入寺時期ははつきりしないものの、永和三、四年頃と思われる。史料の信頼性から、こちらが有力かと思えます。

諸山や十利になった時期がどのような意味を持つのか、考えてみたいと思います。時代順にお話しします。まず、大慈寺が諸山になった延文

四（一三五九）年十二月です。大慈寺に残っている文書を見ると、畠山直顕は大慈寺に対していくつか文書を出していますが、延文三年十月を最後としています。一方で島津氏久は志布志に進出してきます。それまで南朝方に立っていた氏久は延文五年の正月までに幕府方に復帰し、北朝の年号をまた使用するようになります。延文三年十月までに直顕が大慈寺を保護する立場にあった、一方、氏久と大慈寺の関係ははつきりわかりませんが、氏久が幕府方に戻るのは延文五年正月よりは前ですので、延文四年頃というのはちょうど境目となる時期にあたります。延文四年十二月に大慈寺が諸山になるのは、こういう情勢とまったく無関係ではないはず。諸山や十利は必ずしも幕府が一方的に認定するのではなく、寺格を得たい寺院やその檀那が申請して幕府に認めてもらう場合も多かったと思われる。推測を逞しくすると、一時的にせよ幕府方に復帰することにした氏久は、幕府への帰順の証として、新たに勢力下においた大慈寺を、幕府に申請して諸山としたのではないだろうか。

では、大願寺が諸山になった可能性の高い、永和三、四年頃というのは、九州はどういう情勢だったでしょうか。この時期の九州を考える際には、応安三（一三七〇）年の今川了俊の downward が重要。九州は南朝勢力が非常に強いために、幕府は強力な人を九州に派遣しますが、義満が將軍になった直後に、今川了俊が派遣されます。九州では、征西將軍宮という南朝側の皇族を中心とした南朝勢力と、了俊とそれに味方する国人たちの勢力とで大きな対立軸が出来ます。島津氏は了俊が downward した後、ある事件を経て微妙な姿勢をとります。幕府側に対して従う姿勢を見せながら軍勢を派遣しなかったり、あるいは明確に反対の立場をとったりします。さて、ちょうどこの前の年、永和二年の八月、それまで薩

摩・大隅守護であった島津伊久・島津氏久が解任されて今川了俊が両国守護になります。島津氏が反幕府の立場をとっていたために了俊が守護となつてこの地域を統治しようとするわけです。この時期は国人達が了俊に味方したために、島津伊久・氏久は、形勢不利とみて、永和三年九月ころに幕府方に帰順します。翌十月には、了俊方の国人は一揆を形成し、団結を図ります。この一揆の中には、大願寺の檀那である祁答院渋谷氏も入っています。このような情勢のもと、大願寺の諸山が認定されています。この時系列から推測すると、おそらくは、了俊が、味方をしてくれる祁答院氏への報償として、幕府に大願寺の諸山認定を申請したのではないかと考えられます。

諸山・十刹の認定からはずれますが、この時期の大慈寺を考える時にとても大事な事象として、『大慈八景詩歌』があります。康暦二(一三八〇)年頃、今川了俊が要請して、京都の五山の禅僧達、春屋妙葩ら百人ほどや主だった公家達が大慈寺に関して漢詩や和歌を詠み、義堂周信が序を、二条良基が跋を寄せている、当時の第一人者達が集まつて作った作品です。全体は残っていないのですが、断片的に伝わっています。康暦の政変の直後、春屋妙葩が京都に復帰した直後にあたりますので、この作品の作成は、春屋妙葩が京都の禅僧たちを統括するための一つの拠り所にした可能性があります。

では現地はどのような情勢だったかという点、日向では了俊と島津氏久が引き続き対立していて、ここでは了俊の方が圧倒的に不利です。この前に都城合戦というのがあり、了俊の方が敗れたようです。志布志には氏久がいるようですので、志布志の大慈寺も氏久の管轄下にあつて、了俊は手を出せない状態かと思えます。それにも関わらず大慈寺を詠ん

だ作品を京都の人たちに作らせているのは、氏久との関係を改善しようとする方策だったかもしれません。事象は政治的背景に置いてみると別の意味を持ちうる、という例としてあわせてお話ししました。

さて、大慈寺が十刹になったのは、時代が下がって文安元(一四四四)年八月です。前將軍足利義教の兄弟に大覚寺義昭という人がいまして、京都を追放されて九州に下ってきました。最終的には島津忠国に殺害されます。この大覚寺義昭への対応をめぐって忠国と弟の持久が対立するという構造が出来てしまい、文安元年に日向の国人は一揆を結び、対応を相互に了解しています。このなかで、大慈寺は、島津忠国の申請によって、十刹になります。忠国は、自分の基盤が安定していない中で、地域の根柢にしている大慈寺を十刹にすることによって、幕府とのつながりを強くしたということも考えられないだろうかと思つているところです。

まとめますと、諸山・十刹の認定申請は、現地の政治状況と非常に関わることです。今お話しした解釈が正しいかどうかは別として、政治状況を考える材料にすることは出来るのではないかと思つているところです。

つぎに、大隅正興寺と薩摩広濟寺、薩摩感応寺をとりあげます。十刹・諸山の活動を知るうえで一つの手掛かりになるのは、『蔭涼軒日録』と『鹿苑院公文帳』という史料です。『蔭涼軒日録』というのは十五世紀中後期、相国寺鹿苑院の中にある蔭涼軒というところに詰めて、禅宗関係の事柄を將軍に取次をした禅僧が書いた公的な日記です。そこに諸山以上の住持任命に関する記事がたくさん出てきます。索引を引いてみ

ると鹿児島関係で出てくるのは今お話ししていた大慈寺、大願寺に加えて、後に十利になる正興寺だけで、それ以外の三ヶ寺、広濟寺、感応寺、安国寺は見えません。『鹿苑院公文帳』というのも類似した史料ですが、それでも、もう少し時代が下がって十六世紀になります。これは住持任命書の頒布元のリストのようなものです。大慈寺のほか、大願寺については非常に細かく記されていて、色々な方が住持をされていることがわかります。ほかに正興寺、加えて大隅安国寺が少しだけ出てきます。一方、薩摩の広濟寺と感応寺はここにもみえません。広濟寺と感応寺というのは、少なくとも諸山としての活動が顕著ではないということが言えるであろうと思っています。

広濟寺は、いまは墓石を残すのみです。広濟寺の檀那は島津氏の一族である伊集院氏です。十五世紀半ばに伊集院氏が一時期、没落しますが、十六世紀後半に雪岑という方が住持になって、再興します。『薩藩旧記雑録』には、長祿四（一四六一）年の住持の任命書が掲載されており、時の島津家の当主であった島津忠国が崇薫首座を住持職に補任しています。諸山に認定されていますので、本来であれば幕府からの任命書が出るはずですが。特殊な事例として、玉村竹二さんという禅宗研究の大家の「公帖考」という論文に紹介されています。

感応寺は、東福寺と同じ聖一派で、出水市野田にあり、非常に古い由緒をもっていて、開山は榮西、鎌倉時代の末に島津忠宗が禅宗で再興しています。島津氏の初期五代のお墓があることで知られます。

『感応寺由来』という感応寺のことを書付けた史料によると、暦応二（一二三三）年、これは南北朝のごく早い時期、尊氏の時期ですけれども、この年に諸山と十利になったと書かれています。ただし、他の史料

表4 鹿児島県内 十利・諸山に関する文字史料

大慈寺	大慈寺文書☆ 大慈寺所蔵史料 旧記雑録☆ 蔭涼軒日録 鹿苑院公文帳 靈松集★ 惟肖巖禪師疏★ 不二遺稿 翰林葫蘆集 島隠漁唱 ほか
	永和剛中宋版一切経施入関係：東福禅寺転法輪蔵記 即宗庵修造化縁籍
	康暦八景詩歌関係：空華日用工夫略集 空華集 雲巢集★ 雲壑猿吟 畠山切（伝来多様）
大願寺	蔭涼軒日録 鹿苑院公文帳 旧記雑録☆ 祁答院旧記 龍涎集★ 禿尾長柄帚★ 袖中秘密蔵★ 寅闇四六後集 上井覚兼日記 ほか
広濟寺	伊集院系図☆ 旧記雑録☆ 伊集院由緒記 上井覚兼日記
感応寺	感応寺由来ほか感応寺所蔵史料☆ 旧記雑録☆
正興寺	蔭涼軒日録 鹿苑院公文帳 上井覚兼日記
大隅安国寺	鹿苑院公文帳

☆は『鹿児島県史料』所収 ★は『五山文学新集』所収

では確認できません。広濟寺も含めて、いつ諸山になったかは確定できませんが、諸山としての権利をあまり行使していない、諸山としての立ち位置を政治的に利用しようとしていなかったことの反映だろうと思っています。この辺りはもう少し考えなくてはならないと考えています。

これまで京都・鎌倉の五山、十刹、鹿兒島県の十刹、諸山のお話をしませんでした。今日の要点は、五山以下の寺格の認定は、政治的背景のもとに行われる、ということになります。最後に、鹿兒島県内の禅宗寺院に関する史料についてお話ししたいと思います。鹿兒島県内のお寺は廃仏毀釈の影響が大きくて、石造物は豊富に残るものの、それ以外の歴史に関する資料はあまり残っていないという印象を持っています。ただ、少なくとも文字史料については、『薩藩旧記雑録』に代表されるような島津家の修史事業による伝来も含めて、思いのほか色々な史料が残っています。

表4をご覧ください。気の付いた史料を列挙しました。これ以外にもまだあると思います。大慈寺の場合には、お寺に残った文書、『旧記雑録』、『蔭涼軒日録』など。『靈松集』は、日向出身の禅僧の語録で、大慈寺の住持が就任する際のお祝いの文章など、豊富に入っています。また、今日はお話できていませんけれども、大慈寺としてもう一つ大事なことから、二代の剛和尚の時、『宋版一切経』を中国から持ってきて東福寺と大慈寺に納入しており、その関係史料も残ります。先ほどお話しした八景の関係史料もあります。

大願寺は、お寺として残りませんが、大願寺跡墓塔群は県指定の史跡です。文字史料では、『祁答院旧記』という史料、あるいは天祥一麟と

いう禅僧に関する記録のなかに見えるほか、大願寺関係の詩文が多く残っています。まだ出てくるのではないかと思います。

広濟寺は、伊集院氏関係の史料に見えますし、感応寺は今もお寺がありますのでご所蔵史料があります。これだけでもかなりの量の史料になりますので、検討する材料は少なくないと思っています。しかも、掲げた史料のうち、多くのものは活字で見ることができます。『五山文学新集』というのは、先ほど名前を出しました玉村竹二さんが作った史料集です。先行する『五山文学全集』という叢書もあって、『翰林葫蘆集』や『空華集』は『五山文学全集』に入っています。そして何より『鹿兒島県史料』です。おおくの古文書、系譜類、また『旧記雑録』を活字で見ることが出来ます。今回調べてみて、活字で見られる条件は揃っており、今わかっている史料だけでもいろいろ考えることが出来るのではないかと感じましたので最後に申し上げます。

では長くなりましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

【おもな参考文献】

- 今枝愛真『中世禅宗史の研究』東京大学出版会 一九七〇年
上田純一『九州中世禅宗史の研究』文献出版 二〇〇〇年
五味克夫「野田感応寺の史料について」『鹿大史学』二八 一九八〇年
斉藤夏来『禅宗官寺制度の研究』吉川弘文館 二〇〇三年
斉藤夏来「叢林と夷中」『歴史学研究』七九 二〇〇四年
玉村竹二『日本禅宗史論集』上・下之一・下之二 思文閣出版
一九七六～八一年

新名一仁『室町期島津氏領国の政治構造』戒光祥出版 二〇一五年

新名一仁「南北朝・室町期における渋谷一族と島津氏」

『新薩摩学 中世薩摩の雄 渋谷氏』南方新社 二〇一一年

堀川貴司『瀟湘八景』臨川書店 二〇〇二年

『都城市史 通史編中世・近世』二〇〇五年

山口隼正「畠山直顕と大慈寺」『中世史研究会会報』七 一九六七年

山口隼正「日向大慈寺入寺疏と京城諸山疏・相城諸山疏」

『宮崎県史研究』一一 一九九七年

※ 本稿は、平成二十九（二〇一七）年二月十八日（土）に黎明館講堂で行われた、山家浩樹先生（東京大学史料編纂所教授）の黎明館講演会「禅宗寺院と室町幕府」の御講演内容を、筆記を基にまとめたものです。

（文責 黎明館調査史料室）